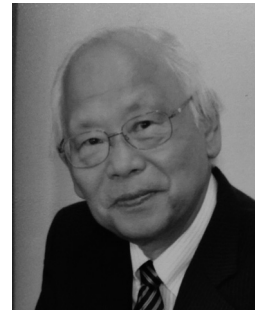


会長挨拶



京友会会長 山崎 高哉

新型コロナウイルスの感染拡大が止まらず、9月に入っても記録的な暑さが続く中、豪雨や台風による大きな被害も九州をはじめ、各地で相次ぎましたが、同窓会員の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。お見舞い申し上げます。

さて、去る7月4日、令和2(2020)年度京都大学教育学部同窓会(京友会)総会が開催され、藤田裕之前会長の後を引き継ぎ、新会長に私、山崎が選任されました。昭和37(1962)年学部卒業(Aコース)、昭和42(1967)年博士課程修了で、現在、満80歳です。80歳を機に、すべての公職を辞し、悠々自適の生活に入ろうと思っていたのですが、前研究科長の稲垣恭子先生に頼まれて、断わり切れず、大役をお引き受けすることにいたしました。それと申しますのも、私は学部入学から大学院修了までの9年間と、教員としての22年間を京都大学教育学部・教育学研究科でお世話になりましたので、そのささやかなご恩返しになればと思い、お引き受けした次第です。

今後は、昨年の創立70周年記念事業を成功裡に遂行されるとともに、コロナ禍に伴う学生の生活支援を迅速に実施されました藤田前会長の運営方針を継承しながら、かつ役員と事務局の皆様、そして会員の皆様の「敬老精神」に助けられて、会の充実・発展に微力を尽くしたいと存じますので、何卒よろしくご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

同窓会は、文字通り、同窓の人たちが集まり、先輩・後輩・同輩の縦と横のきずなを深め合う会合です。今日の社会は、コロナ禍の影響で、人と人との

きずな・結びつきが断ち切れかねない危機を孕んでいます。同窓会に出席して学生時代の思い出話に花を咲かせれば、それぞれ別の道に進んでいても、すぐに強く固いきずなで結ばれ、懐かしく、和気藹々として盛り上がるものです。また、恩師を囲んで旧交を温められるのも、同窓会ならではの楽しみです。

したがいまして、京友会といたしましては、会則にあります通り、年に1回の総会の開催と会報の発行とともに、新入生の歓迎会や卒業生・修了生の歓送会の開催—残念ながら今年は実施できませんでした—、厳正なる審査を経て、年間数名の大学院生への研究に対する助成金の授与、留学生による優秀な論文への国際賞の授与、学部生の学生活動支援などを継続的に実施しますとともに、創立70周年を機に「次世代の教育と知の継承に寄与しうる革新的な研究・教育拠点を目指して」おられる教育学研究科とより密接な連携を図りながら、院生・留学生への研究助成のみならず、研究科のグローバル化へのより手厚い支援ができればと願っています。

さらに、コロナ禍で苦しんでいる学部生・院生に対して、京友会独自で緊急生活支援のための募金活動を行うことが総会で承認されましたので、ご協力をお願いいたしましたところ、多くの皆様から多額のご芳志を賜り、誠に有難うございました。早速学生の生活支援に有効に活用させていただきます。

最後になりましたが、京友会の今後ますますの発展と会員の皆様のより一層のご健勝、ご活躍をお祈りいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

令和元年度 京友会国際賞の選考結果

2020年6月3日 審査委員 南部啓子・南部広孝

氏名	学年	論文題目
ほう えいせい 彭 永成 (中国)	D1	結婚情報のメディア史 －雑誌『ゼクシィ』を中心に－
ぞん しおん 孫 詩榕 (中国)	M2	Schadenfreude in friendship: Explore the mechanism of feeling pleasure along with guilt (友人関係におけるシャーデンフロイデ：罪悪感の伴う快感情のメカニズム)
き はくれい 祁 白麗 (中国)	M2	藤岡貞彦による学校論の意義と課題 －環境教育のあり方に焦点を合わせて－

彭氏の論文は、日本ではこれまで注目されてこなかった結婚情報誌を対象とし、ゼクシィを中心に据えながら類似の雑誌も視野に入れて丁寧に考察した、優れた論文である。情報雑誌研究の新たな地平を開拓するとともに、本稿の知見はさらに、理想的な花嫁像や家族間の権力関係の変化の考察などより興味深いテーマへ展開する可能性がある点で、優れた研究であると評価できる。

孫氏の論文は、心理学実験を通して、Schadenfreude（他人の失敗を喜ぶ）という感情の起こる要因の解明を目指した優れた研究である。従来、嫌な相手を想定して研究されてきたこの感情に対し、本論文では友人へのSchadenfreudeにも着目している点、またこれに近い日本語の概念として「いい気味」という言葉を取り上げ、文化差にも注目している点で興味深い内容である。

祁氏の論文は、藤岡貞彦を取り上げ、環境教育を切り口にしながら、学校のあり方、そして教育のあり方を学校の内外の視点からバランスよく検討した、優れた論文である。中国において得られた問題意識の上に、従来は社会教育の観点から検討されていた藤岡の論について学校論の面から考察し、住民運動との関係性などを取り上げながら、学校教育と社会教育をつないだ壮大で深い内容となっている。

以上のように、いずれも受賞に値する素晴らしい論文であると判断し、三本の論文を受賞対象とした。今後も、日本語の能力も磨きながら研究を進め、三人の研究生活が世界に向けてますます発展されることを期待したい。

平成30年度 研究助成事業報告

令和元年9月30日まで助成

氏名	学年	申請種別	講座	指導教員名	内容題目
ふわ さおり 不破早央里	D2	研究集会の参加費への補助	心理臨床学	田中康裕	箱庭療法作品の分類の試み
いしい かよう 石井 佳葉	D3	研究費の補助	臨床実践指導学	高橋靖恵	ロールシャッハ法におけるイメージカード選択の現状に関する質問紙調査
いらい ゆか 岩井 有香	D3	研究費の補助	心理臨床学	桑原知子	中学校の“別室”における現状と教職員と心理職の協働について
ほう えいせい 彭 永成	M2	研究費の補助	教育社会学	佐藤卓己	ネット時代の結婚情報誌『ゼクシィ』からみる“消費する花嫁”
ただ もえ 武田 萌	M2	研究費の補助	教育学	広瀬悠三	ヒューム『人間本性論』における「共感」－人間形成論における「共感」概念の可能性

■不破 佐央里

平成30年度京友会助成金をいただきまして誠にありがとうございました。今回助成をいただいた研究では、スイスのユング心理学分析家 Kalf によって考案され、日本で心理臨床領域だけでなく、教育・福祉領域など幅広い領域で用いられている心理療法である箱庭療法の中で、人はどのようにして治癒に向かうのかというプロセスを明らかにしていこうとする研究です。これまで実際に行われた箱庭療法の事例を収集し、分析していく第一段階として、箱庭作品から分析するための指標を作成する研究を行いました。作成された指標は従来の理論からも支持され、性差や呈する症状などの間に差異が見られました。本研究で得られた結果は今後、より多くの研究に用いることが出来ると考えられ、さらなる箱庭療法の知見を得られると考えています。

今回の研究結果は、2018年10月21日に新潟青陵大学で開催された日本箱庭療法学会第32回大会において発表いたしました。発表では多くのご意見をいただき、本研究の意義を再確認すると同時に、研究デザインや結果に対するご指摘を受けて本研究の課題を確認することができました。本研究の課題を再検討し、指標の改訂等の修正を行い、さらに適用する事例を、日本で刊行された事例を網羅する範囲に広げた研究結果を2019年9月6日ドイツベルリンにて行われた国際箱庭療法学会第25回大会で“A Meta-Analysis of Japanese Clinical Cases of Sandplay Therapy: An Exploratory Study of Establishing Assessment Tool of Sand Trays”として発表しました。今後は日本国内で本結果について学会発表を行った後に論文として投稿を予定しております。本研究結果が心理臨床学に対する大きな示唆を得られるものであると考えております。

助成金は、日本箱庭療法学会第32回大会が開催された新潟への旅費の一部、妥当性を高めるための外部コーディング協力者への謝金や資料収集のために使わせていただきました。ご支援いただきましたこと、深く感謝いたします。助成期間は終了いたしました。さらなる研究を進めることや研究結果を広く発表していくことに邁進していきたいと考えております。誠にありがとうございました。

■石井 佳葉

心理検査の一つであるロールシャッハ法は、1921年に H. Rorschach によって発表されて以来、現代

に至るまで各国の臨床現場において用いられてきました。私が着目している「イメージカード選択」という手続きは、臨床実践の中で徐々に導入されるようになりました。具体的には、10枚のロールシャッハ図版の中から、好き、嫌い、父親、母親、自分など指定されたイメージに合うカードを選択した後、その理由について説明してもらいます。そして、そこで得られた反応をもとに心理的アセスメントに役立てることを目的として用いられます。ロールシャッハ法を通して様々な精神症状や精神障害の特徴を把握しようとする研究は多く積み上げられてきましたが、イメージカード選択に焦点を当てた研究は数えるほどしかありません。そのため、この手続きによって、被検者のどのような側面を理解することが可能なのか、心理的アセスメントにどの程度寄与し得るのかについてはほとんど示されていないと言えます。

そこで、本研究では本邦におけるイメージカード選択の実施状況および学習機会を把握することを目的として、ロールシャッハ法を施行している臨床心理士を対象に質問紙調査を行いました。その結果、調査協力者の90%以上がこの手続きを認知しているにもかかわらず、施行者によって教示や解釈の方法が異なることが示されました。この背景として、イメージカード選択については、専門学会主催の研修会や大学院においてほとんど扱われていないなど、学習機会の不十分さが推察されました。そのため、イメージカード選択は各臨床現場で用いられる中で独自に発展してきた可能性が窺われ、心理的アセスメントとしての位置づけが曖昧になっていることが示唆されました。なお、この調査をもとに執筆した論文は京都大学大学院教育学研究科紀要第65号に掲載されています。

頂いた助成金は、調査対象者・機関への謝礼と郵送費、関連資料・文献の購入、調査に関する学会参加費・交通費の一部に充てさせていただきました。この助成事業のおかげで、今後の研究課題の第一歩を踏み出すことができました。心より感謝申し上げます。

■岩井 有香

平成30年度京友会助成金を頂きまして有難うございました。私ども学校臨床研究会は、臨床心理学の視点から児童生徒の心の理解や教師と心理職の協働について研究しております。平成30年度は、不登校対策の1つである中学校の「別室」（不登校傾

向の生徒が活動する教室以外の校内の場所)に着目し、その現状と教師や心理職の捉え方や関わり方について調査研究を実施しました。現在、「別室」に関する法規はなく、各学校、地方自治体がそれぞれの実態に合わせて試行錯誤で行っています。そのため、調査協力校を探すことは容易ではありませんでしたが、OB・OGの方とのつながりや助成金を頂いたことにより、広範囲の地域の学校に協力を依頼することが出来ました。

調査の結果から、「別室」には4つの構造が見られましたが、利用する生徒、関わる職員、行われる活動は様々でした。教師と心理職共に、『生徒が安心して人とつながる機会を持ち、学習やコミュニケーションのスキルを身に着けることを通して教室復帰を目指して欲しい。』という思いを持っているようでした。しかし、「別室」での活動や関わり方が自由で多様であるが故に、専門職としての関わりが曖昧になり、自らの専門性を超えて活動する場面が生じ、そのことが迷いや葛藤となっていることが窺われました。そして、それぞれの専門職が互いの専門性や葛藤を理解して「別室」に関わっていくことによって、従来の専門職同士の連携、協働ともアウトリーチとも異なる新しい連携、協働が生まれる可能性が示唆されました。

研究結果は、日本心理臨床学会第38回大会において口頭で発表いたしました。多くのご意見を頂き、学校臨床に関わる方々に役立つ提起が出来たと感じました。また、助成金を使い、研究結果のフィードバック資料を作成し、協力頂いた学校に送付することも出来ました。

助成期間は終了いたしました。この結果を論文として学会誌に投稿し、より多くの学校臨床に携わる専門職の方々の日々の活動に寄与するよう努力して参りたいと思います。

■彭 永成

本研究は今日の日本において、最も売れているブライダル情報誌『ゼクシィ』を対象とし、そこで構築される結婚イメージについて検討しました。

晩婚化・未婚化問題が深刻化していく中、結婚をビジネスとする『ゼクシィ』はどのように今日の「一人勝ち」の場面に至りましたのか。また、これらの「結婚問題」を直面している結婚情報誌の中では、どのような結婚イメージが描かれていたのか。この二つの疑問を出発点として、雑誌の変化に伴い、結婚のイメージの変遷とその原因を明らかにすること

が本研究の目的とします。

歴史分析と質的分析の手法を用いる本研究によって、以下のことが分かりました。

『ゼクシィ』は創刊初期の頃、販売部数が予想より下回るなど苦戦を強いられたこともありましたが、その後は個人購読への依存から企業広告に収入源を見出す形へビジネスモデルを転換しました。2000年代に入ってから、様々の新事業への試みや、新たな結婚文化への対応を重ねて、今日の「結婚するならゼクシィ」と称される地位にまで成長しました。それに伴い、『ゼクシィ』が人々の結婚式の準備段階で果たす役割も「礼義教本」から「アイデア集」へと変わりました。雑誌ブランドの知名度が拡大していくと共に、『ゼクシィ』はブライダル産業の新規市場開拓に貢献し、日本の結婚文化並びに結婚式文化の変容にも大きな影響を及ぼしました。

誌上で描かれた結婚イメージは21世紀に入って、花嫁が「ステキな奥さん」から「完璧なヒロイン」へ変身を遂げ、花婿が「主人公」から「脇役」へ降格され、「監督」役だった両親が権力を失い、結果的に結婚式の特別出演としての役割に甘んじるようになりました。それ以外、『ゼクシィ』が構築する結婚イメージの特徴としては、結婚や結婚式における男女地位の逆転や、結婚式をめぐる関係者内部の合意形成におけるゲートキーパー、あるいはオピニオンリーダーとしての花嫁という表象が見られました。

助成金につきましては、主に『ゼクシィ』の雑誌購入とコピー、資料収集ための旅費及び関連文献の購入に使わせていただきました。博士課程に進学する後にもこのテーマについてさらに研究を進み、出来るだけ早く成果を公表すると考えております。研究助成をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

■武田 萌

本研究は、18世紀スコットランドの思想家デイヴィッド・ヒューム(David Hume)が、主著『人間本性論』において示した「共感 sympathy」概念に関するものです。本研究の目的は、ヒュームにおける「自己」のあり方の検討を行なうことを通して、「共感」が可能にした自己のあり方を示し、「共感」の射程に自己の問題が含まれると明らかにすることです。

「共感」という概念は、古代から現代に至るまで、哲学に限らず様々な分野において検討が試みられて

きた概念です。そのような「共感」に関する概念史の調査とヒュームの「共感」概念に関する先行研究から、「共感」の指す内容が、それぞれの時代の思想における「自己」のあり方を反映して変遷していることが明らかになりました。

これをうけて、ヒュームにおける「自己」のあり方を、17 - 18 世紀において重要視されていた人格の同一性に関する議論を参考にしながら調査しました。その結果、ヒュームは「自己」を位置付ける際に個々の記憶に重要な位置を与え、「自己」を変化しながら存在し続けることのできる一つの体系というモデルで示していたことが明らかになりました。

そしてこの体系において、同一性を失わせる働きと同一性を作り出す働きとの両方を担っているヒュームの「共感」は、変化しつつも固有性を保ち

うるしなやかな「自己」という体系のあり方に深く関わっている、という結論が導かれました。以上の「共感」に関する理解は、環境や他者との関わり合いによって自己が変容する、という現象を「共感」概念の射程に収め、それによって広く人間形成に関わる領域に関する考察に寄与すると思われま

す。上述の研究の途中までの成果を、2018 年 10 月に行われた教育哲学会で発表させていただきました。そして、発表の場でいただいたレスポンスに助けられながら、「共感」と「自己」のあり方の検討に関する修士論文を執筆いたしました。頂いた研究助成金は、主に教育哲学会への参加に関する費用、そしてヒュームの著作とこの研究に関する資料の収集のために充てさせていただきました。このような貴重なご支援をいただき、本当にありがとうございます。

平成31（令和元）年度 研究助成事業報告

令和2年9月30日まで助成

氏名	学年	申請種別	指導教員名	内容題目
鄭 漢模 <small>じん はんも</small>	D3	高等教育 開発論講座	飯吉 透	新しい大学像の創造と認識に関する研究 - 1963 ~ 71 年の英国オープン・ユニバーシティを中心に -
元木 幸恵 <small>もとぎ さちえ</small>	D3	臨床心理学講座	高橋靖恵	ロールシャッハ法によるナルシシズムの理解
坂田 千文 <small>さかた ちふみ</small>	M2	教育・ 人間科学講座	森口佑介	他者と一緒に作業する際の幼児の注意変化と学習に関する検討 - 並列行為, 共同行為, 協同行為の観点から -
比護 遥 <small>ひご はるか</small>	M2	教育社会学講座	佐藤卓己	民国期中国におけるリテラシーと大衆動員のメディア史的研究
ピフォール ガルベスマルセロアレハンドロ <small>PIFFAUT GALVEZ Marcelo Alejandro</small>	M1	教育社会学講座	稲垣恭子	関西地方に居住するイスマノアメリカ人労働者の適応過程 - 社会文化的側面に注目 -
つきかわ せい 月川 青花 <small>つきかわ せい</small>	M1	教育・ 人間科学講座	田中智子	海軍技術者養成機関としての大学 - 委託学生制度を中心に -

■鄭 漢模

カナダの教育学者 George Fallis は、大学とは、常に「場所」であってきており、大学の学びは「同じ時間、同じ場所に集まった人々のコミュニティの中に存在」してきたとしました。しかし、1969 年英国において設立されたオープン・ユニバーシティ（以下、OU）はこの主張に全くそぐいません。OU は、物理的なキャンパスを有しておらず、学生たちはテレビ、ラジオを通して自主的に学ぶ大学であり、教員と学生たちは異なる場所、時間の中で、教え、学び、直接対面する機会は非常に限られています。私は、こうした OU が「大学」として認められていく過程を追うことで、「大学とは何か」に関する手がかりが得られると考え、研究を遂行しました。とり

わけ、本助成を受けて、貴重な資料を入手することができ、その結果、今後の研究において活用できそうなことを明らかにすることができました。

英国において初めて設立された大学は、11 世紀のオックスフォード大学、ケンブリッジ大学です。大学自体の歴史は他国に比べても非常に長いほうですが、それ以来、約 800 年の間、新しい大学が設立されることはありませんでした。結果的に、両大学が有するイメージは、それ自体が「大学」の定義として英国社会において根強く定着したのです。以後、19 世紀半ばから 20 世紀半ばに至るまで、ロンドン大学を始め、様々な大学が設立されますが、「大学」から大きく外れることなく、むしろ両大学を模倣していました。いわゆる新しいタイプの大学が設立されたのは 1960 年代のことでした。当時設立された

大学のうち、一つがOUです。OUは、遠隔教育をメインとし、入学試験なしで学生を受け入れていました。当時の大学としては非常に破格的な試みと言えます。しかし、こうしたOUでさえ、「大学」として認められるために様々な試みを行いました。盛大な卒業式など、セレモニーがその例の一つですが、教育の質に関わる要素として挙げられるのが、対面空間です。

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、今後、通学制の大学においても遠隔授業の活用がニューノーマルとして定着していくと思われる中、これからの研究においては、こうした対面空間の活用と意味を、国際比較、また、実証的研究を通して追求していきたいと思っています。

■元木 幸恵

平成31年度（令和元年度）京友会助成金をいただきまして、誠にありがとうございました。今回の研究で用いましたロールシャッハ法は、曖昧な図版刺激を提示し、それに対してどのように反応するかを見ることでその人のものの捉え方、世界の見え方を理解するために用いられる心理検査です。この度、ナルシズム、日本では「自己愛」と訳されることもある単語ですが、このナルシズムの程度をロールシャッハ法で検討することを目的として、研究を行いました。大学生・大学院生をはじめとした青年期を対象としたのは、一般的に青年期にある人たちは心の変化の途上にあり、さまざまな傾向のデータを得ることができると考えたためです。

今回の研究は、令和2年11月15日・16日に岐阜県高山市文化会館にて開催される第24回ロールシャッハ学会にて、発表する予定にしておりました。しかしながら、昨今のCOVID-19による影響にて、同大会は一部オンラインでの開催が決定となりました。その反応特徴からWEB上では発表が難しいと判断し、次年度以降に改めて発表することになりました。今後は、学会発表を行った後に論文として投稿を予定しております。本研究結果が心理臨床学に対する大きな示唆を得られるものと考えております。

今回いただきました助成金は、京丹後市の市長さんご協力のもと、地元在住の20代の男女に調査実施した際の、旅費（一部）、施設使用料、調査参加者への謝礼等に使用させていただきました。ご支援いただきましたこと、深く感謝いたします。助成期間は終了いたしました。さらなる研究を進めること

や研究結果を広く発表していくことに邁進していきたいと考えております。誠にありがとうございました。

■坂田千文

この度は、京友会研究助成事業に採択くださり、誠にありがとうございます。

私は、他者と一緒にいるときのヒトの注意や記憶に関して研究を行っております。一人でいるときと違って、他者と一緒にいるときにヒトはどのように外界を知覚し、記憶するようになるのかを、認知心理学の手法を用いて解明する試みを行っています。

同じ部屋にいる他者と一緒に、別々の物を探していると、自分の物を探している最中であっても、ふと、他者の探し物に気を取られ、偶然目に入ったそれが気になってしまうことはないでしょうか。私はこれを実験課題に落とし込んで、どの程度他者の探し物に注意が割かれるのか、また、時間が経った後で他者の探し物が実際にどこにあったのかをどの程度記憶しているのかについて、検討しました。実験には友達同士の大学生のペアに参加してもらいました。PC画面に複数の日常的に目にする物体の写真を呈示し、参加者にはある特定のもの（例えば、一方の参加者は靴、もう一方の参加者は鳥）を探索してもらいました。呈示される物体の位置関係はある確率で繰り返されていました。数回の探索後、参加者には探索する物体の担当を入れ替えてもらい、再び探索してもらいました。探すべき物体が変わっても、友達が探していた物体がどの位置にあったかを参加者が記憶していれば、探索時間が短縮すると予測しました。

今後、本研究では、他者と一緒に作業することが与える、このような注意変化や記憶への影響について、大学生以外を対象として発達的に比較検討していく予定です。

いただいた助成金は、実験参加者への謝礼として、調査費用に充てさせていただきました。本研究によって得られた結果は、学会発表にて報告する予定です。また、今後とも本研究を続けていく所存です。貴重な助成金をいただき迅速に実験が進められたことを、厚く御礼申し上げます。

■比護 遥

民国期の中国を主な対象とする本研究は、読む主体が知識人に限られない大衆へと広がる時代にあっ

て、「読書」という行為にどのような期待がかけられていたのかを明らかにするものです。1930年代に同時多発的に創刊された読書雑誌の言説分析を通して、出版の高速化により読むべき「良書」を選択的に提示する機能への需要が高まったこと、そしてその機能が戦時下の動員の意図と結びついたとき、政治的有用性の観点から読むべき本を限定して、エリート的な「読書のための読書」を批判することにつながったということがわかりました。この論争は、何かと「役に立つ」学問が求められる今日の社会にも示唆を持つものであると感じます。

上述の研究成果は、中国現代史研究会と日本マス・コミュニケーション学会で口頭報告を行い、修士論文「大衆読者の消費的発見と政治的動員：1930年代中国の読書雑誌」としてまとめました。さらにその一部は論文「抗戦期中国の読書と動員：政治コミュニケーションから見る『読書生活』（1934-1936）」として『現代中国研究』第45号に掲載されることが決定されているほか、その他の部分についても論文投稿を進めております。

また、修士論文提出後は、上述したような民国期の読書規範が人民共和国成立後、とりわけ文化大革命期にいかにして引き継がれたのかという観点からさらに分析を進めました。「毛沢東時代の読書規範：政治文化の連続性に着目して」と題して京都大学人文科学研究所の共同研究班で報告を行ったほか、論文投稿も準備中です。

本来は助成期間中に中国へ調査に向かう予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実現は叶いませんでした。しかしその代わりに、外国文献の購入を中心に、資料収集に充てることで、無事研究を進展させることができました。貴重な研究助成をいただきましたことに、改めて心よりお礼申し上げます。

■ピフォー・ガルベス マルセロ

私は国際移民の現象、特に日本におけるイスパノアメリカ人のケースを研究している。当初、イスパノアメリカ人が日本の社会・文化にどの程度、また、どのように適応しているかという幅広いテーマを明らかにしたいと考えていたが、研究を進めるにつれ、移民者の生活の個々具体的な側面がもっと面白くなり、それらを深く探索することに意義があると思うようになった。現在、イスパノアメリカ人どうしの対人関係、彼らのアイデンティティ、日本のメディア映像作品の強い影響、国際恋愛、また、彼らの文

化を背景とした仕事への態度といった、様々なテーマを構想しており、それぞれをより深く考察している。

今のところ、日本におけるイスパノアメリカ人日本文化ファンの実践とアイデンティティとそのファン文化の内部的な分離と共通点に関する研究論文とともに、移民は植民地主義の正当な補償であるのかをめぐって考察する文献レビューが、京都大学の『教育・社会・文化：研究』に発表されている。また、イスパノアメリカ人の移民の社会現実に関しては、新しい社会環境で社会関係を構築するプロセスをどのように経験しているのか、どのような因子が社会関係を促進するか、どのような因子が妨げるかという質問を提起する。したがって、修論では、新しい社会文化環境における社交性の構築者としての移民者の役割に注目する予定している。これにより、社交性の構築における中心的な要素としてのアイデンティティの過程に向け、イスパノアメリカ人移民者がインフォーマルおよびフォーマルの社交性をどのように構築するか、さらには、その過程中、アイデンティティをどのように構築するか、どの程度変化しているかという問題を説明する。この助成金を奨励してくださることで、自分の研究と関連した重要な先行研究を入手させ、これらの多様なトピックに研究を適応させてくることができた。

■月川 青花

平成31（令和元）年度京友会助成金をいただきまして誠にありがとうございました。

私は、戦前の高等教育と軍事・社会の連関に問題関心があり、具体的には、日本海軍が海軍技術士官の教育を帝国大学に委託する制度に着目して研究を進めております。

海軍が技術官を養成するための教育を高等教育機関に委託する試みは、帝国大学創設以前からみられます。海軍側の依頼により、文部省との協議を経て1884年、主に海軍技術官を養成するため、東京大学理学部に附属造船学科が設置されています。その後、1886年に帝国大学工科大学が設置されると、同年には帝国大学と海軍省との間で協議がなされ、海軍技術士官の養成を工科大学に委託することが取り決められ、翌年には約定書にもとづいて実施されています。

私は、従来の研究では着目されることの数少なかった、帝国大学－文部省－海軍省の間で往還した公文書を分析することで、三者間の交渉・協議のな

かでどのように上記の制度が形成され、運営されていたのかを、主に 1880 年代の後半から 1910 年代前半の形成期に焦点を当て、明らかにすることを目標にしています。

また、上記の委託の制度によって東京帝国大学を卒業し、海軍の技術者に就任した、平賀譲の遺した文書（平賀譲文書）を読み解き、海軍の技術者教育の実態を捉えることも試みています。研究成果の一端は、2020 年 3 月刊行の『東京大学文書館紀要』第 38 号に掲載されております。

いただいた助成金は、先述の公文書（東京大学文書館所蔵）の複写データの交付手数料、本研究に関連する書籍の購入費に充当させていただきました。当初は、東京への史料調査に要する交通費や宿泊代に使用する予定でしたが、コロナ禍での制約により、やむを得ず用途を変更させていただきました。

助成事業のおかげで、研究の第一歩を踏み出すことができました。今後は、修士論文の執筆に邁進する所存です。心より感謝申し上げます。

令和2年度 研究助成審査会選考結果

助成期間 令和2年7月6日～令和3年3月31日

京友会令和2年度研究助成事業について、鳶野克己委員と西岡加名恵委員により審査が行われた。応募は12件あり、申請書にもとづいての審査を行い、研究目的・研究計画・助成金の用途・研究業績書・指導教員の推薦書の記載にもとづき、研究内容の説明の明瞭性や研究計画・助成金の用途の妥当性などを協議した。

その結果、うち10件を研究的な価値が認められ一定の水準に達しているとして採択し、①研究計画に示される研究方法についての明瞭性、②申請された助成金の用途の研究計画に対する妥当性、③募集要項に対する申請内容の妥当性、などを考慮し、予算上の上限額の範囲内で配分の判断を行った。

2020年6月22日 審査委員 鳶野克己・西岡加名恵

氏名	学年	講座	指導教員名	内容題目
おう れいび 王 令薇	D1	教育社会学講座	佐藤 卓己	学校教育改革をめぐる公共的議論への大衆参加のメディア史－安定成長期に箔目して－
かまだ よしき 鎌田 祥輝	D1	教育・人間科学講座	西岡加名恵	英国における市民のための科学教育の成立と展開－1970年代のゼネラルサイエンスの位置づけに着目して
Kang Nan (かん なん) 康 楠	D1	教育認知心理学講座	齊藤 智	日本語単語の音韻処理における意味記憶の関与－日本語を第二言語とする中国人学習者を対象に－
みた けいこ 三田 桂子	D1	連携教育学講座	松下 姫歌	砂漠の国の説話に描かれるパトスと物語構造に関する心理臨床的研究
しのはら ふみお 篠原 史生	M2	教育・人間科学講座	田中 智子	戦前期救護法下における京都の精神病患者処遇
しいな けんと 椎名 健人	D2	教育社会学講座	竹内 里欧	上田敏とその時代－師弟関係と文学史的評価－
たおか だいき 田岡 大樹	D1	教育認知心理学講座	楠見 孝	無謀な賭けの心理的メカニズムの解明－認知モデルの構築と個人特性との関連性の検討－
とどろき かほ 等々力 花歩	M2	教育・人間科学講座	明和 政子	他者との行動同期が乳幼児の援助行動に与える影響－発達科学のアプローチによる検証－
さわだ かずき 澤田 和輝	M2	教育認知心理学講座	野村 理朗	Awe and Identity
ふじむら たつや 藤村 達也	D1	教育社会学講座	稲垣 恭子	戦後日本における受験文化の教育社会学的研究

令和2年度研究助成事業助成対象者コメント —助成を受けて—

■王 令薇

本年度の京友会研究助成事業に採択いただきましたことを、大変光栄に存じております。

私の研究関心は、日本における青少年をめぐる教育議論にあります。特に、学校教育にかかわる異なるアクター（例えば、日教組、文部省、研究者など）が一般大衆の教育議論への参加をどのように捉えていたのかを検討しようとしています。

先行研究では、教育議論の「内容」に注目するものは多く存在しています。非行やいじめなどの学校

問題が大きさ報道されたこと、また臨教審以降の教育改革が前提としてきた認識枠組みに問題があることが批判されてきました。しかし、教育の問題をめぐる議論への一般大衆の参加と参加する手段、更にそれに異なるアクターが寄せた期待／懸念といった、教育議論の「形式」に関連する重要な問題に注目する研究はまだ少ないです。

また、大衆が教育改革をめぐる公共的議論にアクセスする重要な手段としては、当時すでに一般大衆に普及していたテレビというメディアに期待が寄せられました。政界や教育界における大衆の教育議論

への参加に対する認識は、テレビの活用への期待と交錯していると考えられます。そのため、私は、テレビでの教育問題をめぐる報道・討論に対する政界や教育界の認識を取り上げ、総合的・比較的に考察する予定です。

いただきました助成金は、資料収集のための費用に充てさせていただきます。最終的に本研究の成果を京都大学教育学研究科に提出する博士論文に発展させる予定です。貴重なご支援に改めて深くお礼申し上げますとともに、有効に活用できるよう研究に邁進する所存です。

■鎌田 祥輝

このたびは、令和二年度京友会研究助成に採択いただき、誠にありがとうございます。私は将来の市民を育成する上で必要な科学教育の在り方を探究しており、現在は、英国の中等教育段階における科学教育の歴史について、STS (Science, Technology and Society) 教育の系譜に着目した研究を行っています。

英国の議論に着目する理由として、1960年代以降、「万人のための科学教育はどうあるべきか」という問いに対応して、教育目標や内容について様々な論争があることが知られていることがあげられます。STS教育は、科学・技術・社会の相互作用を扱う教育であり、科学が関わる社会問題を授業で取り上げることで知られています。STS教育は、将来の科学者を育成するために科学に興味を持たせ、科学概念を身につけさせるものではなく、「科学とは何か」「科学者とはどのような人々か」などの理解を子どもに求め、科学以外の側面にも目を向けながら社会問題に対するディスカッションや意思決定を行うことを通して、将来の市民の育成を目指す科学教育でした。

このような英国のSTS教育は現代の科学的リテラシー概念にも影響を与えています。英国のSTS教育の理論・実践を明らかにし科学教育史に位置づける研究を通して、科学教育の在り方に対する示唆を得られると考えています。

いただいた助成金は資料収集のための費用に充てさせていただきます。貴重なご支援をいただいたことに改めてお礼申し上げます。本研究によって得られた成果は、論文執筆等により報告いたします。

■康 楠

助成を採択されいただき、喜びと感謝の気持ち

は一杯です。

私の研究焦点は日本語単語の音韻処理にあります。特に単語の音読における意味記憶の関与は、第二言語として日本語を学習する人たちにどのように現れるのかを検討しようとしています。例えば、「近道」という日本語漢字単語は、構成漢字の複数の発音の中、「ちかみち」という正しい読み方を取るには、その言葉における意味知識の関与が必要となります。そして認知的意味障害症を罹患した日本語母語話者は「きんどう」という読み方が圧倒的にみられ、それは一つ一つの漢字に対応するより一般的な音読みを取るしかない結果であると考えられます。このような現象はLARCエラーと呼ばれ、これまでの研究は中国人第二言語学習者においてもより一般的なエラーであると発見されました。一方、中国語における漢字単語の読み習慣、または学習者の習熟度といった点も意味記憶の関与に影響を及ぼしているのではないかと考えられます。これからの研究計画では、このようなエラーの生起や類似の現象を検討することで日本語学習の認知メカニズムをよりよく理解することに微力を尽くしたいと考えます。

助成を受けることは、いつも丁寧な指導と温かい励ましをくださった指導教官先生、または京都大学教育学部同窓会からの応援のおかげです。この助成で今後の研究計画の実施に経済的な支えを提供することだけでなく、一人の研究者として、自分の研究に対する揺るぎのない自信を持っていて歩いているような気もしました。今後もこの感謝の気持ちを忘れず、期待を裏切らずに研究を邁進していこうと思います。

■三田 桂子

この度は、「砂漠の国（中近東）の説話」と「砂漠のイメージ」に関する心理臨床的研究へ京友会研究助成事業のご助成を頂き、深く感謝申し上げます。

砂漠の国は、緑豊かな日本から遥かに遠い異国に感じられることでしょう。しかし、事例研究論文を通読していると、「砂漠のイメージ」がクライアントによって意味深く表現され、臨床家達が鋭敏に“なにか”を感じ取っている姿が多々描き出されています。外的に遠くにありながら、内的にリアリティをもつイメージなのではないか…、という想いから、砂漠の国の説話研究と国内の事例のメタ分析から構成する本研究を立案しました。

また、中近東の説話の舞台とは、キリスト教・イスラム教・ユダヤ教等を生み出した地でもあり、人

類の争いの火種を抱え続ける臍とも言えます。この独特な風土に伝わる紀元前の古代メソポタミアの神話「ギルガメッシュ叙事詩」や、紀元後の説話「千夜一夜物語」などから、砂漠の国に息づく人々のパトス、時間感覚、方向感覚、価値観、死生観などを抽出し、砂漠における生について考察し、水と緑溢れる日本で表出される「砂漠のイメージ」の展開と意味について、事例を通じて具体的に検討してゆきたいと思います。

最後に、本助成金は文献収集費の一部として活用させて頂き、ご支援を励みにしながら、研究成果を学会発表や論文発表に繋げて参ります。

■篠原 史生

今年度の京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私の研究テーマは、戦前日本の精神障害者をめぐる歴史です。とりわけ、戦前京都において救護法という法律の下で精神障害者がどのように処遇されていたかを明らかにしたいと考えています。救護法とは、現在の生活保護法に連なる法律で、貧困者救済を主眼とする救貧法でした。さらに同法は、方面委員と呼ばれた人々の日々の活動に支えられていたことも特徴でした。方面委員は、地域住民から選ばれた無給の名誉職で、地域の貧困世帯に直接訪問して救貧活動を実践した、いわば、戦前の日本において地域の末端で社会福祉事業を担った人々でした。当時の方面委員は、日々の活動のなかで貧困な精神障害者やその家族が置かれた状況を目の当たりにして、何を議論し、どのように行動したのか。当時の方面委員や行政担当者による議論や動向を整理し、その内実を明らかにすることが当面の課題です。

戦後の生活保護法と制度的な連続性を有する戦前の救護法による精神障害者者処遇の実態を解明することは、現在も続く「貧困」と精神障害者という古くて新しい問題を考察するためにも不可欠な作業だと考えています。

いただきました助成金は、資料収集のための費用に充てさせていただき予定です。貴重なご支援をいただけることに改めて感謝申し上げますとともに、有効に活用できるよう研究を進めていく所存です。

■椎名 健人

この度は京友会研究助成事業に採択くださり、誠にありがとうございます。

私の研究テーマは、京都帝国大学英文科（現文学部英語学英文学専修）の初代教授であり訳者・詩人であった上田敏と、その周辺人物の関係性についてです。夏目漱石と同じ1903年～1907年に東京帝国大学英文科英文科講師を務め、漱石と同じ1916年に没した上田は、英文学者と作家を兼ねる知識人/芸術家として、生前から常に漱石と比較され、しばしば否定的に語られてきました。

経歴こそ酷似している両者ですが、当時の文壇において上田の属していた位置は、実際には漱石のそれとは大きく異なります。森鷗外、永井荷風ら現在「耽美派」にも分類される作家たちと上田の親密な関係性や、その中で生まれた文学サロン「パンの会」で共有された文明観は、漱石周辺で育まれた大正教養主義的価値観とは異なるもう一つの対立軸を明治・大正の文学界に形成していたというのが現時点での私の見通しです。哀れみと軽蔑によってのみ記憶される漱石の引き立て役。日本近代文学史におけるサリエリ。このような役割に留まらない上田の歴史的位置について考察したいと思っています。

いただきました助成金は、資料収集のための費用にあてる予定です。本研究で得られた結果は、学会発表及び論文執筆の形で発表いたします。温かいご支援をいただきましたことに改めて感謝申し上げますとともに、貴重な機会を有効に活用できるよう力を尽くす所存です。

■田岡 大樹

この度は、令和2年度京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は、ギャンブルにおいて、人がリスクの高い賭け、すなわち、「無謀な賭け」を行う心理について研究をしております。無謀な賭けは、さらなるギャンブルを通じて損失分を取り返そうとする問題行動（負け追い）とともに、ギャンブル依存症の進行に関与していると考えられます。こうした行動の背後にある心理的なメカニズムを解明し、その抑制方法を開発することができれば、エビデンスに基づいたギャンブル依存症の予防が可能になると期待されます。

私は、ギャンブル中の認知プロセスを数理モデルとして表現することで、無謀な賭けの背後にある確率や価値の判断を明らかにできると考えています。そして、これらの認知プロセスに、事前の勝敗経験や感情、個人特性といったリスク因子がどのような形で影響を及ぼすかを解明することで、効果的な予

防法や介入法の提案につなげたいと考えております。

このような観点から、本年度は、1. 数理モデルの作成、2. 個人特性に焦点を当てたモデルの検証を行う予定です。頂いた助成金は、Web上で行われる調査・実験の費用に活用させていただきます。本研究を通じて、当該分野の研究を大きく前進させられると確信しております。

貴重なご支援に改めて深く御礼申し上げますとともに、本研究が実りあるものとなるよう、全力で取り組んで参ります。

■等々力 花歩

この度は、京友会研究助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は、他者と行動を同時に行うことが、乳幼児の他者を助ける行動に与える影響について、研究を行っております。

ヒトは、血のつながりがない他者や見知らぬ他者を助けるという点で、特徴的な動物です。例えば、授業中にペンを落とし、手が届かず困っていたら、近くの人が拾って渡してくれた、という経験をしたことはないでしょうか。こうした他者を助ける行動（援助行動）は、生後14か月頃から見られるようになります。

近年、他者と行動を同時に行った場合、同時に行わなかった場合に比べて、援助行動が多く見られることが示されています。そこで、私は、他者と行動を同時に行うこと（行動同期）が、乳幼児の援助行動の表出にどのような影響を与えるのか、実証しようとしています。また、乳幼児の気質を評価する質問紙を用いることで、援助行動の表出や行動同期の影響における個人差についても明らかにしたいと考えております。援助行動の表出に関与する要因や、個人差について検討することは、様々な発達特性を持つ方に対して、社会的場面における発達支援や介入方法を考える上で非常に重要であるといえます。

いただいた助成金は、研究機材購入に充てさせて頂きます。貴重なご支援に改めて深く御礼申し上げますとともに、本研究がより実りあるものになるよう、今後とも邁進していく所存です。

■澤田 和輝

この度は、京友会研究助成事業に採択くださり、誠にありがとうございます。私は、畏敬の念に関し

て、心理学調査・実験や神経科学的手法を用いて研究を行っております。大自然等の、既存の認知的枠組みの更新を必要とするような広大な刺激に対する感情反応を畏敬の念と呼びます。従来、社会心理学の研究より、畏敬の念が、人々の「人生に意味がある」という感覚を高めたり、自身の高次な信念（例えば、有神論的信念）を強化したりすることが明らかにされてきました。これらは、畏敬の念が人々のアイデンティティ探索や発達を促すことを示唆します。現実場面に目を向ければ、しばしば畏敬の念を喚起する、宗教的儀式や聖地巡礼等が、通過儀礼として人々のアイデンティティの発達に役割を担ってきました。私は、未検討である畏敬の念とアイデンティティ発達との関連を実証的に検討したいと考えております。また、本研究課題は、道德教育や観光産業への社会還元が期待される意義深いテーマであると考えております。いただいた助成金は、心理学調査の費用にあてさせていただきます。本研究によって得られた結果は、学会発表や論文執筆によって報告いたします。

■藤村 達也

研究助成事業に採択いただき、大変光栄に存じます。私は現在、戦後日本の大学受験をめぐる文化にかかわる研究を進めています。これまで教育学において主に教育問題として扱われてきた受験を文化の観点からとらえなおし、受験文化が果たしてきた社会的機能を明らかにすることを目指しています。これまで行ってきた研究では大学受験予備校に焦点を当て、予備校において教養主義的な授業がいかなる役割を果たしてきたかを明らかにしました。予備校という空間と一見相容れないようにも思われる「教養」に焦点を当てて検討することで、一般的なイメージとは異なる予備校の姿を描き出すことを試みました。今後の研究では、さらに対象を受験雑誌や通信添削といった受験メディアに拡張して分析を進め、戦後日本の受験文化がいかなる文化装置として機能してきたのかを総合的に解明することを目指します。こうして受験文化に光を当てることは、日本の教育を深層で支えてきた日本型教育文化の特徴を明らかにすることにも繋がると考えています。いただいた助成金は、予備校や通信添削会社などの関係者へのインタビュー調査の費用に充てさせていただきます。今後とも研究活動に鋭意努力してまいります。